

牧師室から (2021.7.11)

この頃の新聞には、在日のミャンマーの方々があちこちで自国の国軍によるクーデターへの抗議活動をしている記事が度々目に付く。毎日新聞の7月3日(土)の夕刊、一面には赤い塗料を塗った三本指を立てている手の写真が大きく載せられている。それは軍の暴力によって流された血を象徴しているという。テレビや新聞に報道されるミャンマーの現状を見ると、あまりにも凄まじく暴力的な光景に目をそらしたくなる。軍部に抗議する市民を無差別に武力で弾圧して子どもを含む800人以上が犠牲になったという。ミャンマーの方々の祖国への思いを考えると胸が痛む。

私の韓国での学生時代にもそのような政治的な混乱があった。1980年代に、軍によるクーデターで政権を掴んだ当時の権力者は、それに強く抗議した南の地方の学生、市民らを武力で鎮圧しようとした。その弾圧の無残さは想像を絶するぐらいで、平凡な一般市民、子どもまで多くの血を流した悲しい歴史があった。ソウルにいた私も、それに抗議する学生運動に参加していた。その不正に憤り、同僚たちが受けた拷問と死に涙を流しながら眠れない夜を過ごしていた。母の反対にも構わず、正義と平和を求める若い日の情熱と純真な心で、命さえ惜しまず道に出て叫んでいたのだ。ミャンマーの青年たちの姿を、その時の自分を重ねながら見ていた。

韓国の基督教放送局で紹介された、ある宣教師の話が胸に響く。

彼女はミャンマーで宣教活動をして、神学校まで設立したようである。今は韓国に戻っているが、ミャンマーの現状に心を痛めながら、立っても座っても心配でいられない気持ちであるかのようであった。しかし、コロナ禍も重なって、自分は何もできないでいて、そのようなことでさらに辛さを覚えているが、このように弟子たちを励ましているという。「ミャンマーという国に人たちはそれほど関心がなかったかもしれないが、今は全世界の多くの人々が注目している。悲しいことが起こってはいるが、ミャンマーのために覚えて祈っている人が多くなっている。そこに希望があるのではないか。」

私たちが住んでいる地球のある所で、苦しんでいる人々のことを他人事ではなく、共に泣く気持ちをもって主の前で生きていきたい。この頃のくすんでいる空のように、気が晴れない日々であるが、今こそ、祈りを深める時であるのではないだろうか。

(鈴木善姫牧師)